

和鏡鑄型の復原的考察

—左京八条三坊三町・六町出土例を中心に—

網 伸也

1. はじめに

平安京左京八条三坊では、これまでの発掘調査で銅細工に関する多くの遺構・遺物が検出されている。たとえば、二町の調査では多量の刀装具の鑄型とともに仏具・鏡の鑄型が出土している⁽¹⁾。七町の調査では、礫や炉壁・焼土塊で構成された土壌を検出しており、周辺から埴塙・鑄型などの鑄造関係遺物が出土している。この遺構は鑄造炉の下部構造遺構と考えられ、鑄型には水瓶・釘・刀装具・鏡などがみられる⁽²⁾。また、九町の調査では塩小路路面を良好に検出し、路面の北側で鏡・仏具などの鑄型が出土した。とくに、長方鏡の鑄型は全体が残存しており、共伴した遺物から11世紀末の年代が与えられている⁽³⁾。これらの鑄造遺構は、平安時代後期から室町時代にかけて周辺で銅細工が盛んに行われていたことを示しているが、そのピークは14世紀前半にあるようである。

平成6年度に行ったJR京都駅駅舎および立体駐車場の建設に伴う調査でも、14世紀前半を中心とする鑄造関係遺構・遺物が検出できた。鑄造関係遺物が出土したのは、室町小路と町尻小路に面した平安京左京八条三坊三町・六町・十一町である(図1)。六町・十一町は中世京都において八条院町と称された地域で、室町小路と路面を挟んで存在した建物柱穴群・井戸・鑄造関係遺構を良好なかたちで検出しており、鏡や仏具類・懸仏・蓮弁などの鑄型が多数出土している。また、町尻小路側でも三町で錢・仏像・刀装具・鏡などの鑄型が出土した。この小論では、これらの鑄型のうち三町・六町で多量に出土している鏡の鑄型について資料紹介を行い、いままで不

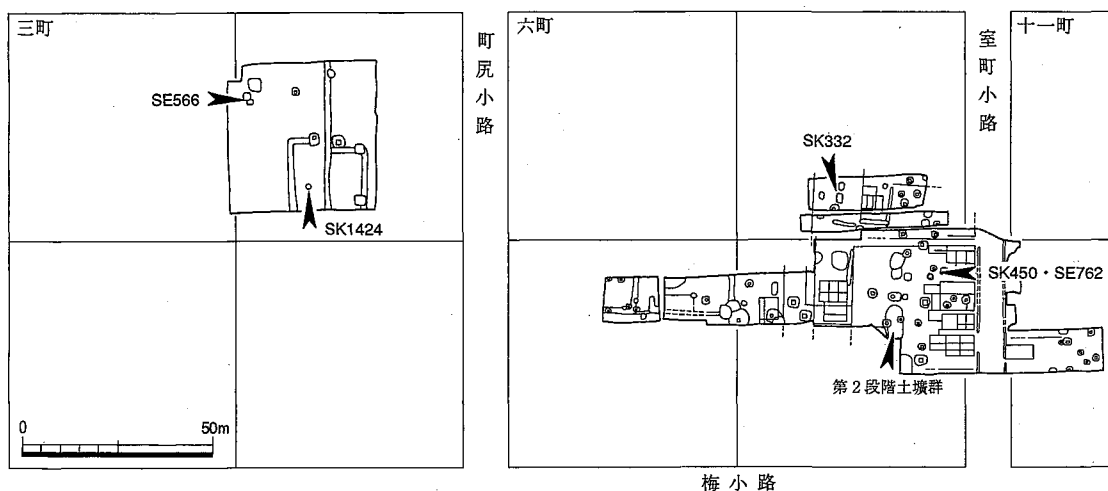


図1 平安京左京八条三坊三・六・十一町遺構配置図

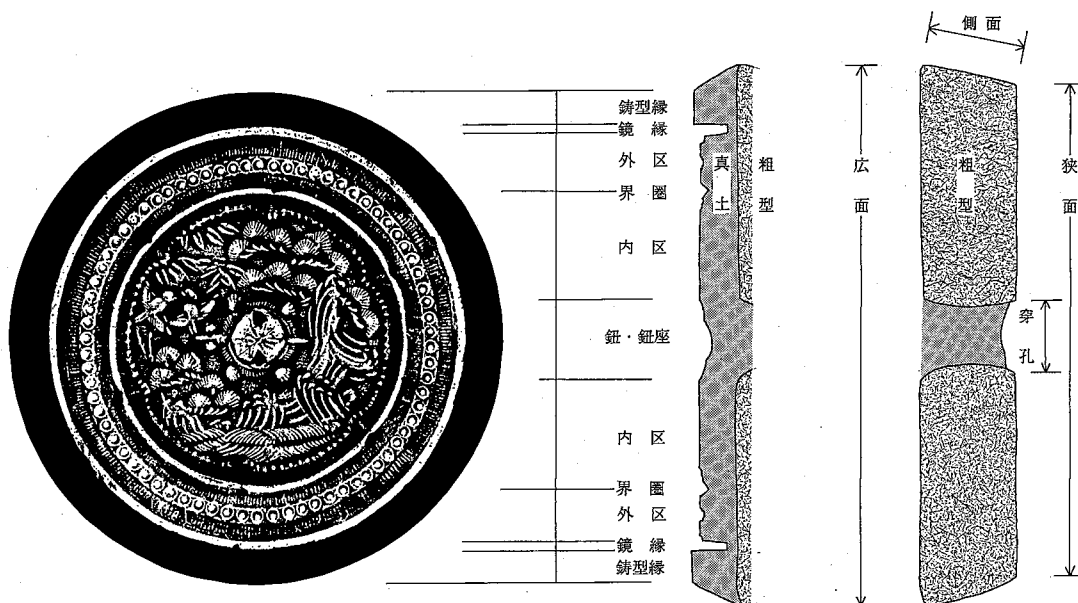


図2 和鏡鑄型の各部位

明な点が多かった和鏡生産について鑄型の構造やその変遷を復元的に考察を加えたい⁽⁵⁾。

2. 出土鑄型からみた和鏡の製作過程の変遷

六町の室町小路側と三町の発掘調査において、多量の和鏡鑄型が出土している。その構造は土台となる円形土製品の上に細かい土を塗り成形したもので、前者を「粗型（アラガタ）」、後者を「真土（マネ）」と呼ぶ。出土鑄型はほとんどが粗型であるが、真土が良好に残存し鏡背面の文様や縁部あるいは鏡面の様相が判明する例も多く出土している。ここでは、13世紀前半のS K 332の一括資料を第1段階、14世紀前半のS E 762・S K 450の資料を第2段階とし、三町で検出した14世紀中頃のS E 566・S K 1424の資料を第3段階として順に観察し、和鏡鑄型および製作過程の変遷を概観してみたい⁽⁶⁾。なお、鑄型の各部位については、鏡背面鑄型の概念図を図2に示しておく。

第1段階（S K 332資料） 六町南北中心ラインに相当する地点で、室町小路から六町中央部に入る東西方向の通路状遺構を検出しているが、その北側で2条の南北柵列で区画された中に南北を長軸とし北辺と南辺中央に柱穴をもつ方形竪穴遺構を4棟検出している。S K 332はこれらの方型竪穴遺構のうちの1棟で、南北2.5m×東西1.5mの簡易な上部構造を持つ建物と想定できる。この床面直上から和鏡鑄型やフイゴ羽口・埴塼片などが出土した。共伴した土器群から13世紀前半の年代が与えられる。

鑄型から判明する和鏡の直径はすべて8cm前後で、これらの粗型の直径は11cm前後である（図3-1・2）。この他の粗型も直径10cm～11.5cmのものが集中しており、小型和鏡を多く生産していたことが推定できる。これらの粗型の厚さは1.5cm前後である。文様は内区が菊花散文や亀甲地文で界圏外区には網代文を巡らす（図10）。菊花散文は型押しによるが他は篋押しによって文様を描いている。鏡面鑄型は小型鏡ではみられないが、粗型直径が約14.5cm前後のものがあ

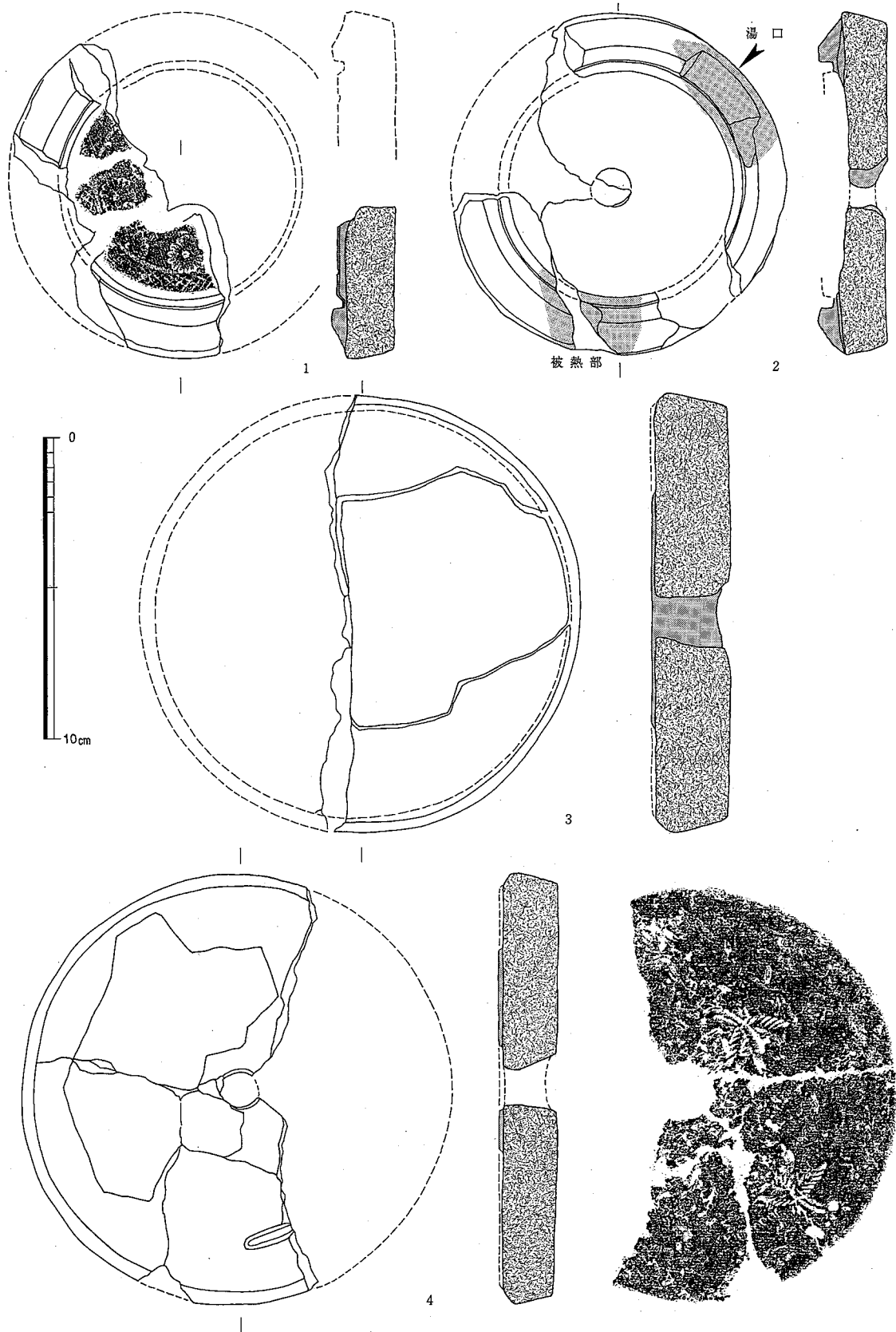


図3 第1段階 和鏡鑄型 (1~4 : SK332)

3-3・4)、粗型直径から推測して直径10~12cmの和鏡に使用されたと考えられる。これらの粗型厚は直径に比例して2cm前後と厚くなる。

粗型は断面が台形になっており、狭面と側面が滑らかな面になっているの対

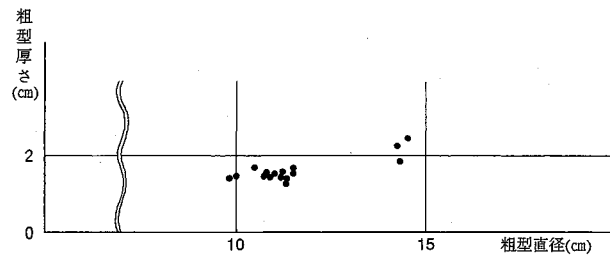


表1 第1段階 和鏡鑄型粗型の直径および厚さ

し、広面は凹凸が激しいざらついた面になっている。粗型中央には穿孔が施されているが、傾向として広面は小さく狭面が大きくなっている。鑄型は破片として出土することが多いが、SK332出土の小型鏡粗型は半分以上遺存している例が多く、製品の歪みを考慮しても直径11cm前後で厚さ1.5cmと非常に規格性がある(表1)。これらの事実から、粗型は円形型に粗型用の粘土を詰めて製作したと考えている⁽⁷⁾。その製作過程は、型に粘土を詰めるのに粘土円板をあらかじめ作っておき、それを型に押し込めたと考えている。粗型中央の穿孔は、この型に付属したものか別後に穿ったものか現状では判断できない⁽⁸⁾。粗型の胎土は白色砂粒を若干含む緻密な粘土であるが、粉殻が多く含まれていたらしくその痕跡が明瞭に残っている。広面にも型に入れた粘土の上から粉殻を多量に撒いて押しつけたようで、そのまま焼成することによって粉殻が燃えてなくなり粗型広面の凹凸が形成されている。このような凹凸面は、真土の剥離を防ぐためにつくられたらしく、真土はあらかじめ焼き締められた粗型の広面に塗られている。

真土は白色微砂粒を多く含む胎土で、非常に薄いのが特徴的である。鏡背面では、文様部で厚さ2~3mm、鏡縁部で厚さ1mmしか真土を塗らない。おそらく真土は二度塗り、最初に全体に塗って挽型による大方の成形を行い、その表面に薄く肌真土を塗る。その後、自然乾燥させてから型押しや篋押しによって文様部を仕上げるようである。鏡縁部は文様部の真土が薄いことから明らかのように、立ち上がりは4mmほどと低い。それに対し幅は約3mmと相対的に広く、外区から縁部にかけての立ち上がりも直角に立ち上がるのではなく、曲線的に立ち上がっている。鏡縁部の外側、つまり鑄型としての縁は真土の厚さ5~6mmで、幅約5mmの平坦面(鏡面鑄型との合わせ目)をもつが、その外側は斜縁となっている。湯口はこの鑄型縁部の一部を2.5cmほど切って作っており、出土資料ではこの湯口部分が非常に強い熱を受けていることが確認できる(図3-2)。なお、粗型中央の穿孔は挽型の軸穴に利用されているが、後述するように一度真土で埋めてから挽型の軸を突き刺して成形したと考えられる。鏡面鑄型では真土は厚さ1mmほどで、粗型の際まで同じ厚さで平坦に塗られている。鏡背面と同じく真土は二度塗りであろう。粗型穿孔部にも真土が充満しているが、挽型の軸の痕跡は確認できない(図3-3)。

これら鏡背面鑄型と鏡面鑄型を合わせることによって鑄込みの段階に移るが、どのようにして型合わせを行って鑄型を固定したか明らかでない。しかし、粗型側面に粘土が付着している例が多いことから、鏡背面鑄型の縁部に作られた斜面部と、平坦な鏡面鑄型の間に生じた断面三角形の透き間に粘土を詰め込み、湯口部を除く鑄型側面全体を包み込むようにして粘土を巻き、軽く焼き締める⁽⁹⁾。そして、「もじ縄」などで頑丈に固定して、「縦注ぎ」で鑄込みに入ったのであろう⁽¹⁰⁾。

なお、和鏡の製作は一鑄一範で、鑄型の構造から鑄型の型合わせは一面分しか行わないと推定できる⁽⁴⁾。ただ、粗型の狭面に真土は塗らないが篋押しで文様を施すものがあり、S K 332からも双鳥文を粗型狭面に施した鏡面鑄型が出土している(図3-4)。この資料では粗型穿孔を鈕座部とし、粗型狭面全体を鏡背面に模して双鳥が配されている。このような粗型狭面の篋押しあるいは型押し文様は、第2段階以降も亀甲地文や蓬萊文などが確認できる。これらは粗型の焼成を行う前段階の作業であり、真土部成形とは直接結びつかないことから、工人が篋押しの習いを行った痕跡とも考えられよう。

第2段階(S E 762・S K 450資料) 室町小路の想定西築地ラインから10~20mほどの地点で数多くの井戸や土壌を検出している。室町小路に面した建物群の裏手に南北に並んでおり、この時期の宅地利用のあり方を知るうえで重要な調査成果であった。これらの遺構から鑄型をはじめとする多量の鑄造関係遺物が出土している。鑄型の種類は鏡・懸仏・台座・蓮弁など小型の銅製品が多く、共伴する遺物の年代から14世紀前半にこの地域で盛んに銅細工が行われていたことがわかる。

和鏡鑄型は粗型を中心に各遺構から出土しているが、鏡背面の文様が明瞭に残る鑄型が室町小路に面した方形縦板組井戸S E 762と、その南西で検出した土壌S K 450から出土している。S E 762は想定西築地ラインから2~3mの地点にあり、建物の裏手ではなく建物群の狭間に設けられた井戸であろう。幅18cm前後の板を一辺5枚ほど縦に並べて横棧で組んでおり、底部には曲物などの水澄まし構造はもたない。一辺0.8mのやや小型の井戸であるが、この地域では一般的な規模である。S K 450は拳大の石や粘土とともに多量の鑄型片や炉壁片が充満した鑄造関係の土壌で、同性格の土壌を他に2基検出している(S K 744・757)。先に述べた七町の礫や炉壁・焼土塊で構成された土壌と構造的に類似しており、鑄造炉の下部構造遺構とも考えられる。

製作された和鏡は、出土した鑄型真土部からほとんどが擬漢式鏡と推定できる(図4・10)。鈕および鈕座は花芯座鈕あるいは亀形鈕で、篋押しと型押しによって洲浜秋草双鳥文・牡丹(双鳥)文・山吹(双鳥)文・亀甲地双雀文を内区に施す。篋押し工具は多種にわたり、文様は繊細で非常に細かい構図となっている。外区の鑄型はすべて界圏部分から剥離しており明らかでないが、界圏の内側に列点文・列環文・輻線文・凸鋸齒文などを巡らしている。

和鏡鑄型の粗型は胎土・焼成ともに第1段階の資料と類似している。初殻痕跡も明瞭に残っており、製作過程は同じであろう。ただ、同段階の遺構から出土した資料を統計的に観察すると、粗型の推定直径が14~16cmのものが圧倒的に多く、厚さもほとんどが2~2.5cmとなる(表2)。

S K 450出土の真土部全体が復原できる資料では、粗型直径15cmで鑄造和鏡の直径11.8cmである(図4-4)。おそらく、同規模の和鏡が多量に鑄造されたものと考えられる。なお、同遺構からの出土例ではな

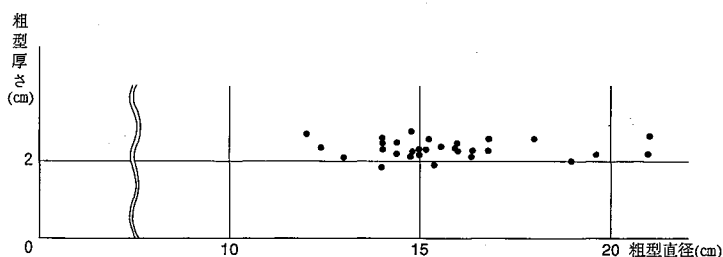


表2 第2段階 和鏡鑄型粗型の直径および厚さ

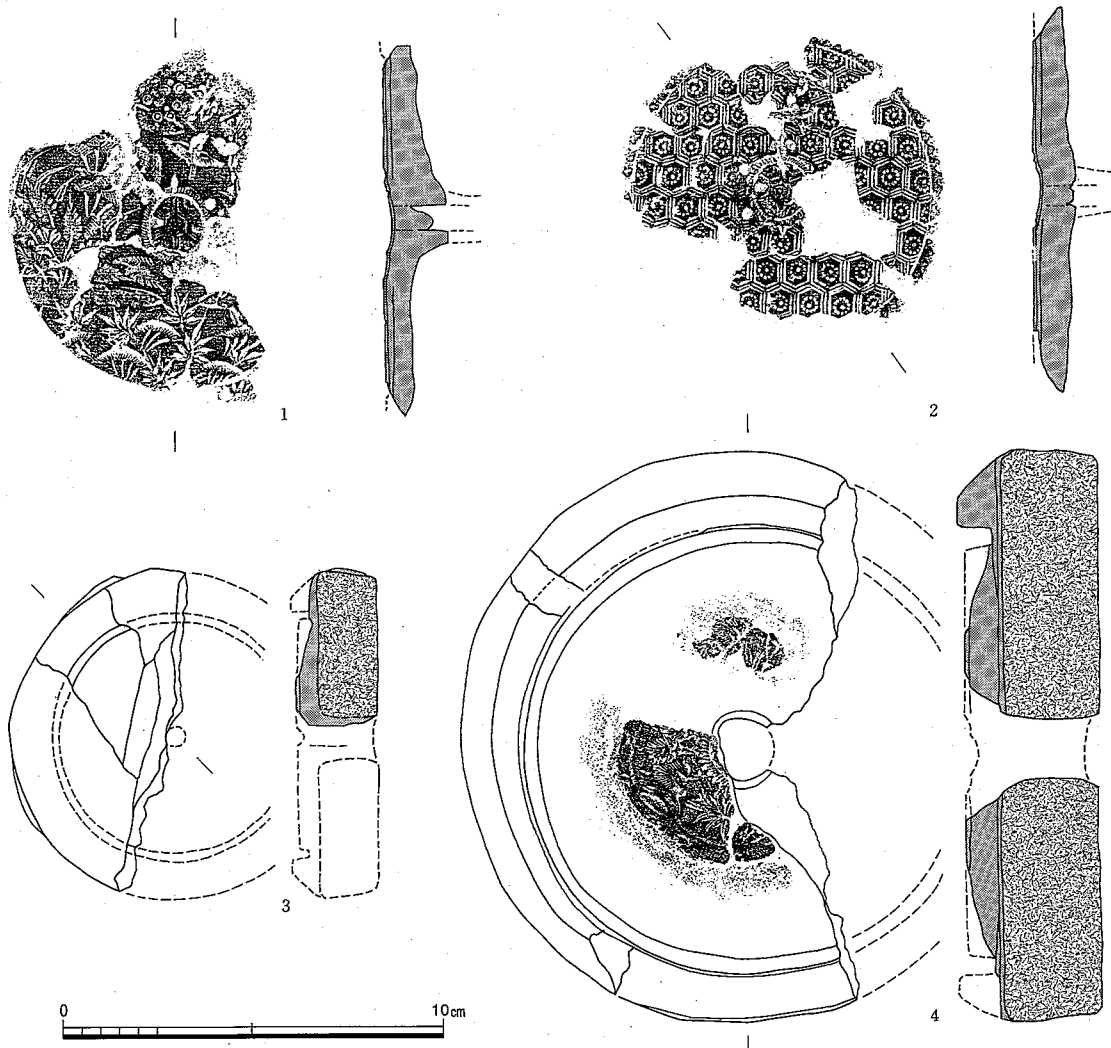


図4 第2段階 和鏡鑄型 (1・2 : S E762、3 : 包含層、4 : S K450)

いが、同時期の遺構から粗型広面の凹凸を粉殻だけでなく、沈線によってランダムに掻き破りを施す資料が数例出土している。粗型広面に掻き破りを施す初源を示すものであろう。また、S K 332資料と同じように、粗型狭面に真土も塗らず篋押し文様が施されている例も出土している。

真土は第1段階と比べて厚く、文様部で1 cm前後である。S K450出土資料で観察すると(図4-4)、粗型広面にまず1~2 mm前後に薄く基盤となる真土を塗り、次に鑄型縁部の真土を周縁に厚さ1 cmほど、文様部の真土を6~7 mm塗って挽型によっておおまかな成形を行う。文様部ではさらに細かい真土を2 mmほど塗って文様面を整え、最後に仕上げの肌真土を全体に薄く塗っている。このように文様部の真土は厚く塗られているが、鏡縁部では基盤の真土の上ですぐ肌真土を塗るだけで、厚さも3 mmほどである。これらの資料観察から復原できる鏡縁は、幅4 mmなのに対し高さが1 cmほどとなる。

また、すべての資料で文様部の外区が鏡縁部に向かって斜めに剥離している。これは鑄型から製品を取り出した時に、鏡縁部に沿って鑄型が斜めに剥離した痕跡と考えられる。これだけ多くの鏡背面内区の鑄型片が出土しているのに対し外区鑄型はまったく出土していないのは、鏡本体を鑄型から取り出した時に界圏部分から縁にかけて鑄型真土が付着し、それを細かく砕いて製品

から取り除いたためと考えられる。これに対し、鏡面鑄型は真土が1～2mmと薄く、基盤の真土の上に肌真土をぬるだけである。

以上のように、鏡背面鑄型の真土が厚くなる傾向は、小型鏡でも観察できる。調査区包含層から出土した復原直径が約6.5cmの小型鏡鑄型でも、真土の厚さは5mmほどある(図4-3)。この資料でも文様部外区の部分が斜めに剥離しており、基本的には鑄型の製作技法は小型鏡でも変わらないことが判る。これは、第1段階との大きな違いといえよう。

次に挽型の軸であるが、粗型から文様部真土が剥離した資料を観察することによって挽型の工程を復原することができる(図4-1・2)。粗型中央の穿孔は従来「鳥目穴」と考えられていたが、今回の出土資料でその詳細が明らかとなった。まず、文様部の真土を塗る段階で粗型中央の穿孔も真土で埋めてしまう。そして、直径5～6mmの挽型の軸を穿孔部の真土中に差し込み、挽型を回転させて鏡縁部や界圏の成形を行うようである。この挽型の軸穴は鈕座部を仕上げる段階で小さな真土塊で埋めてしまうが、穴の底まで埋めないために軸穴の下部が空洞として残っている。

鑄型の縁部の形状も第1段階とほとんど変わらないが、肌真土を平坦面まで丁寧に塗って成形している。これは型合わせの時に、鏡面鑄型とより密着させるために行われたと推定できる。ただ、外斜面には肌真土は施されておらず、型合わせ時の補充粘土が付着している。型合わせの段階で、鑄型側面全体を粘土で包み込むようにするのは第1段階と同じである。湯口の資料は残念ながら出土していないが、鑄込みの方法は前

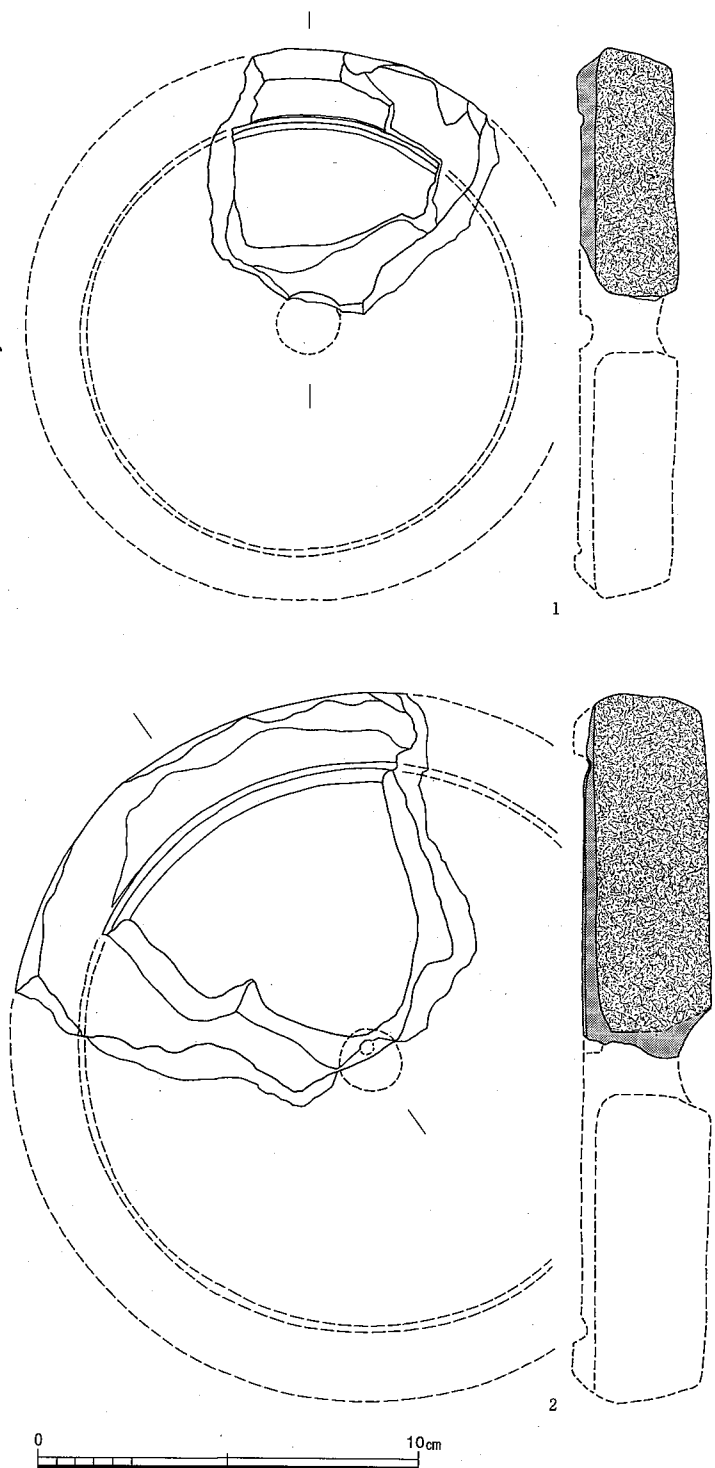


図5 第2段階 素文鏡鑄型

第2段階でみられたような広面に沈線による掻き破りを行う資料が出土している。第2段階ではランダムな沈線であったのに対し、この資料は斜格子に近い状況に変化している（図7-1）。平安京左京北辺三坊五町でも16世紀末～17世紀初頭の粗型が出土しており（図7-2）、これは確実に斜格子を意識

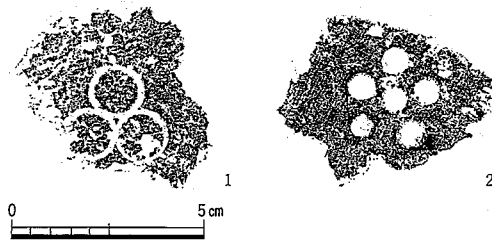


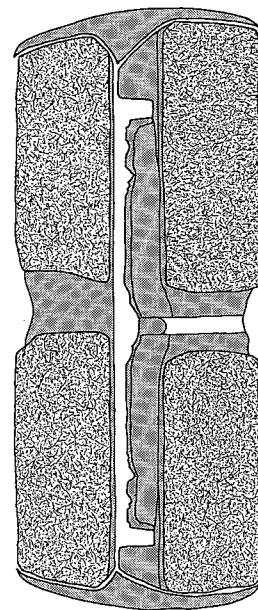
図8 粗型狭面の印刻拓影

して沈線を施している⁽¹²⁾。近世柄鏡の粗型には『御鏡仕用之控書』にみられるように斜格子状の筋目が入られるが、平安京左京二条四坊十一町の発掘調査で18世紀前後の粗型が出土しており（図7-3）、斜格子筋目の伝統を確認できる⁽¹³⁾。このような粗型の筋目の初源は前述したように14世紀前半の第2段階まで遡り、斜格子筋目へと変化していく過程を示す例といえる。

次に真土の問題であるが、厚さは文様部で1～1.5cmと、第2段階よりさらに厚く塗られるようになる。ただ、挽型による成形などは同じ工程が推定でき、外区部分が斜めに剥離するのも同じである。鑄型縁部は肌真土による平坦面が前資料より広くなり、鏡面鑄型との密着面が多くなっている。そして、型合わせ側面に粘土を巻き付けて固定するのは同じようだが、ここでは鏡背面鑄型の縁部外側斜面は明確でない例が多い⁽¹⁴⁾。鏡面鑄型の真土については、前代と変わらず1～2mm程度の厚みしかない（図6-8）。これは鏡面鑄型の時代を超えた特徴であろう。

鏡縁の幅は不明だが外区から直角に立ち上がり、高さが1cmほどに復原できる。鏡縁の形状については限られた資料の中であり不明な点が多いが、第2・3段階で復原できる鏡縁の形状は高い直立縁で第1段階とはかなり異なっており、時期差による型式の変化として捉えられる。

なお、粗型狭面に菊花の型押しや蓬莱文の篋押し文様が認められる点は前段階と同じであるが、SE566資料の中に粗型狭面に紋所でいう「三つ星」の印刻が認められる資料が数点ある（図8-1）。篋押しとは異なり和鏡文様とは直接関係がなく、これは銅細工個人あるいは同一工房を示す印の可能性はある。類例として六町室町小路側の包含層から「星梅鉢」の印が1点出土している（図8-2）。南北朝期を境に「職人」の意味が変化していくという指摘もあり、これらの印は14世紀前半から銅細工が院町の「地」に定着し、権門（八条院町では皇室あるいは東寺）の統治下に置かれつつも、手工業者としての「職人」として自立した活動を行っていく一つの現れと考えられる⁽¹⁵⁾。



以上、平安京左京八条三坊三・六町から出土した和鏡鑄型を、時期の異なる遺構群ごとに3段階にわけて検討してきた。ここで抽出できた鑄型の特徴の変化は、必ずしも時期的な型式変化を示しているとは限らない。地域による工人差あるいは工房差である可能性も捨てきれないのである。しかし、良好な比較資料がほとんどない現段階では、これらの鑄型の変化から推測した和鏡製作の変遷を、時

図9 和鏡鑄型合わせの概念図

間軸上での技術の発展過程として捉えることは充分許されると考えている。

全体の傾向として鏡背面の真土が厚くなり、篋押し文様が繊細・複雑になるが、第3段階には双雀文を菊花型の半押しで表わすように篋押しの省略が多く認められるようになる。これは、和鏡の大量生産への指向を示すものと考えられる。また、鏡背面鑄型の縁部平坦面が広くとられるようになるなど、鑄型の形状に少しずつ形式的発展が認められる。しかし、鑄込みについては第1段階の項で説明した方法が踏襲されたようである。それを概念図で表わせれば、図9のようになる。従来不明な点が多かった中世和鏡の製作工程を、発掘調査資料で復原できたのは大きな成果といえよう。

3. 和鏡文様の変遷

最後に、鑄型群からみた和鏡文様の変遷を考察してみたい⁽¹⁶⁾。鑄型群から観察できる鏡背面の文様の変化(図10)であるが、これは紀年銘資料を機軸とした和鏡の編年観と大きくは変わらない。

第1段階では、鏡背面の文様は内区に菊花文を型押しで散らすものがあるが、素地の空間を多く残しており簡素で落ち着いた鑄上がりが想定できる。界圏外区の網代文が特徴的で、いわゆる藤原鏡との強い共通性を指摘することができよう。外区に網代文を巡らす構図としては、若干時期が遡るが島根県鰐淵寺蔵王窟出土の仁平3年(1153)銘石製経筒と共伴した菊枝飛雀鏡(図11-1)や、京都府籠神社の文治4年(1188)銘青銅製経筒と共伴した菊花飛雀鏡がある(図11-3)。また、鏡面鑄型の粗型狭面に篋押しされた双鳥文は、岐阜県十二社境内経塚出土の文治3年(1187)銘陶製外筒と共伴した薄飛鵲鏡(図11-2)と構図的に類似しており、篋押しの表現方法から若干の退化文様と想定できる。これらの類例から判断して、13世紀前半における和鏡の製作は充分想定できる。

第2段階は最も和鏡製作が盛んに行われた時期であるが、擬漢式鏡が製作されていることで絶対年代がある程度おさえられる。従来の紀年銘和鏡の中で最も古い擬漢式鏡として知られているのは、鹿児島県八幡神社所蔵の嘉元三年(1301)針書銘松竹双雀鏡であるが、当地で製作されたような複雑な外区文様を持つものは中国元の年号である延祐2年(正和4年=1315)の刻銘を持つ瑞花双鳳鏡がある(図11-5)。また、擬漢式鏡ではないが亀甲地双雀文が非常に類似している例として、嘉暦3年(1328)の墨書銘を持つ例(図11-6)がある。これら和鏡の紀年銘と鏡鑄型の共伴遺物の想定年代が非常に合致しており、当地での和鏡製作の時期を裏付けるものである。

八条院町の発展は、後宇多院から東寺に施入された正和2年(1313)を契機としており、このころから銅磬・懸仏・華瓶・金剛鈴などの青銅製仏具が盛んに製作される。和鏡製作もこれらの銅細工たちによって行われたと推測できよう。さらに、貞治6年(1367)4月の『学衆方評定引付』(『東寺百合文書』)には、院町百姓らが銅細工・白粉焼などの跡地のため作物がとれず地子を減少してほしいと起請文を注進している。この文書の中で、遡ること13年前の東寺合戦で屋敷島が荒れ果ててしまったことも記されている。つまり、この史料によって院町の衰退の様子や銅細工の下限を知ることができる。第2段階の和鏡の製作年代も、これらの時間幅の中でおさえら

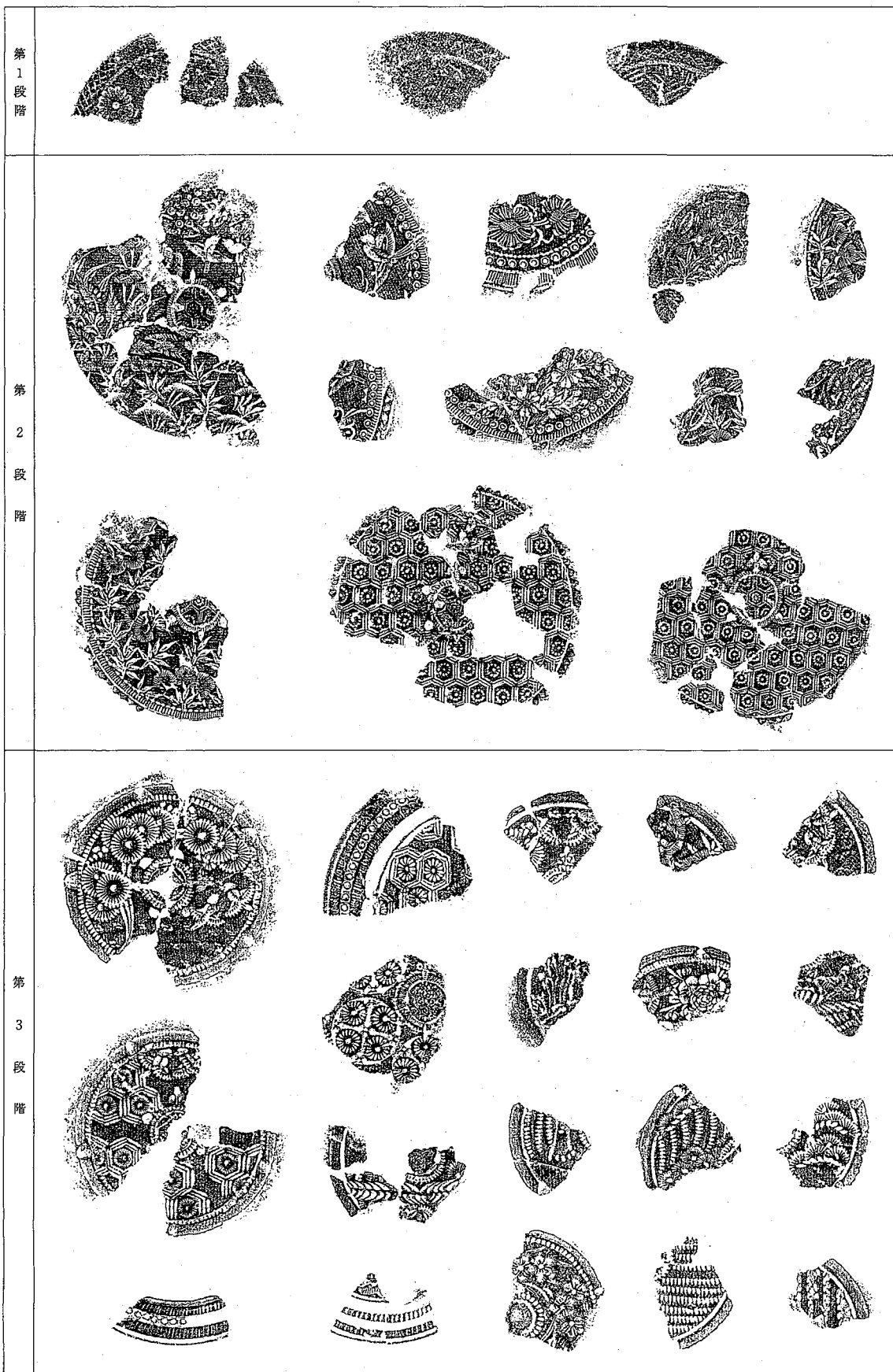


図10 鏡背面文様の変遷 (鑄型拓影 1/2)

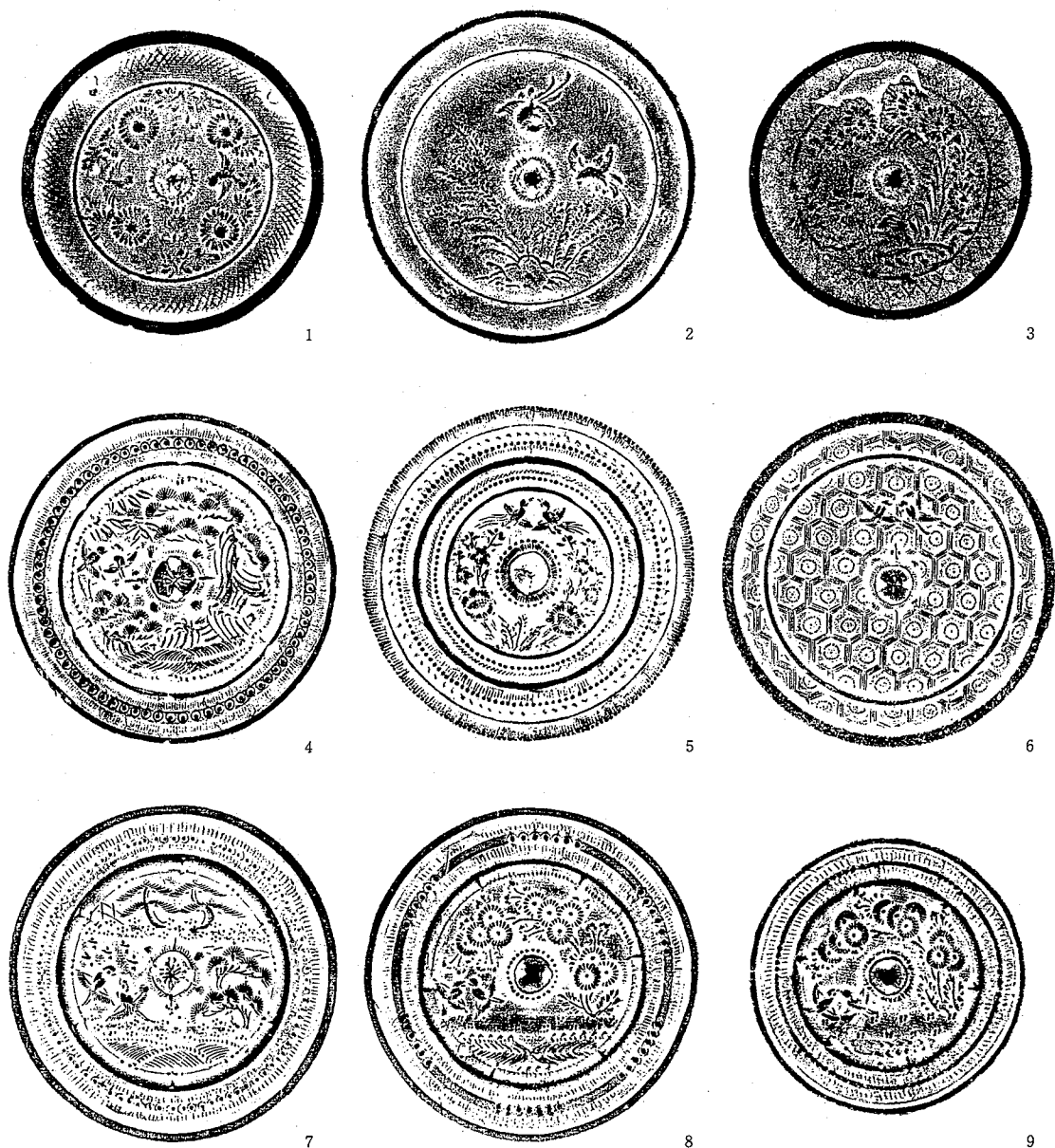


図11 紀年銘鏡拓影（広瀬都巽『扶桑紀年銘鏡図説』より転載）

れることになろう。

なお、第2段階の遺構から素文鏡あるいは鏡板の鑄型が出土していることは注目できる。全体の4分の1あるいは5分の1しか残っていないため詳細は不明だが、山形県羽黒山頂遺跡から儀鏡として素文鏡が出土しており⁽¹⁷⁾、愛媛県大山祇神社にも多くの素文鏡が奉納されている⁽¹⁸⁾。これらの素文鏡は湖州鏡式鏡として把握されているもので、その盛行時期は経塚遺跡などの出土例から平安時代末期～鎌倉時代前期ごろと想定されている。素文鏡は鏡背面の文様がないことや、経塚遺跡出土例の他の多くは寺社奉納鏡であるため、絶対年代を想定するのが非常に難しい鏡である。当地での鑄型が素文鏡であれば、奉納鏡として素文鏡が14世紀まで製作されていたことを示す貴重な例となろう。また、鏡像としての鏡板であれば、同時代の遺構から懸仏の鑄型が多量に出土しており、第2段階が鏡像から懸仏への転換期にあたることになる。鏡像から懸仏への展開は、

一般的に12世紀から13世紀にかけて行われたと想定されることから、鏡板であっても製作年代のうへで非常に大きな問題を提示することになる。⁽¹⁹⁾

第3段階の和鏡鑄型のうち、全体の構図を観察できるものは菊双雀文鏡である。紀年銘鏡では法隆寺西円堂に奉納された永享10年(1438)墨書銘鏡(図11-8)や、天文5年(1536)銘の経筒と共伴した長野県霊泉寺経塚出土例(図11-9)と非常に類似する。しかし、当地の鑄型は遺構での共伴遺物から14世紀中頃のものとして想定されており、紀年銘鏡の類例と年代差を生じている。外区の輻線文と環珠文を巡らした構図に着目すれば、正和3年(1314)墨書銘の蓬萊双雀鏡(図11-4)が全く同じ構図となっている。また、永享10年墨書銘鏡と同じく法隆寺西円堂に奉納された応永20年(1413)墨書銘の松樹双雀鏡(図11-7)も、同じ構図を持っている。

ここで参考になるのが、和鏡における同系文様についての久保智康氏の見解である。⁽²⁰⁾久保氏によると、和鏡の特徴が「(1)文様構成の上で、意匠を同じくすること。(2)文様構成の上で、構図を同じくすること。(3)網代文・流水文などの地文を同じくすること。(4)周縁の断面形、鈕・鈕座などの鏡胎形式が共通性を持つこと。」などの諸条件を満たす場合、同一工房での製作である可能性が高いとされている。外区構図に共通性をもつ紀年銘鏡と、当地での第3段階の鏡鑄型群は類似点が非常に多いことが指摘でき、あるいは当地での製作品とも考えられる。紀年銘鏡は法隆寺への奉納鏡と経塚の埋納鏡などであり、伝世鏡であった可能性もあろう。同じ構図の鏡が時代を超えて製作されることはしばしば見られるが、ここでは遺跡での共伴関係を重視し、第3段階の鑄型群から表出できる鏡背文様を14世紀中頃の様式と考えておきたい。

4. おわりに

以上、平安京左京八条三坊三・六町で出土した和鏡鑄型について検討を加えた。いままで、和鏡の生産地として平安京左京八条三坊周辺および平安京郊外の白河周辺が有力視されていたが、具体的な和鏡生産の中心地についてはほとんど判らないのが現状であった。今回の調査で、平安京左京八条三坊三・六町が鎌倉時代末から南北朝期にかけての和鏡生産地の中心であったことが判明した。そして、具体的な鑄造過程をも復原できたことは非常に大きな成果であったといえる。しかし、当地では和鏡だけを生産したのではなく、銅磬や懸仏などの仏具をも生産しており、それらの鑄型も多数出土している。つまり、東寺領である八条院町を舞台に様々な仏教関係の製品が生産されたのであり、その具体的な全体像を描くには和鏡鑄型の検討だけでは不十分である。今後は和鏡以外の鑄型の整理を進めることによって、八条院町の銅細工の実体に迫って行く必要がある。また、二町や七町など周辺域の銅細工との関係、あるいは平安時代後期の七条町との関係も今後の課題である。残された課題はあまりに多く、現在の私の力量を超えている。これから少しずつ整理を進め、これらの課題に一つでも応えていけるようにしたいと考える次第である。

なお、この小論をまとめるにあたり東洋一・家崎孝治・勝部明生・木下博文・久保智康・杉山洋・鈴木廣司・武部直子・原田一敏・前田洋子・南孝雄・三宅敏之・村木二郎・森下章司・森田稔・百瀬正恒・山本雅和の各氏から貴重なご助言・ご教示をいただいた。また、拓本・製図につ

いては清藤玲子・桜井みどりの両氏にご協力いただいた。文末ながらここに感謝の意を表したい。

註

- (1) 『平安京左京八條三坊二町』平安京跡研究調査報告第6輯 (財)古代学協会 1983年
- (2) 『平安京左京八條三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1982年
- (3) 発掘調査は平成5年に古代文化調査会によって行われ、現在整理が行われている。調査成果については同調査会の家崎孝治氏のご教示による。
- (4) 具体的な遺構や遺物の概要報告は、以下の文献で行っているので参照していただきたい。なお、個々の遺構番号については井戸はSEに、土壌はSKに統一している。
『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
網伸也・山本雅和「平安京左京八條三坊の発掘調査」『日本史研究』第409号 1996年
- (5) 和鏡細部の形態・名称については基本的には広瀬都巽氏の考えを踏襲した。
広瀬都巽『和鏡の研究』角川書店 1974年
- (6) なお、各鑄型の製作過程あるいは実際の鑄込みの想定を行ううえで以下の文献を参照にした。
香取秀真「御鏡仕用之控書 註記」『考古学雑誌』第30巻第1号 1940年
香取忠彦「日本の鑄造技法における鑄型の問題」『ミュージアム』第185・186号 1966年
石野亨『鑄造 技術の源流と歴史』産業技術センター 1977年
『日本の古鏡—女装美のプロデューサー』大阪市立博物館 1985年
五十川伸矢「中世白河の鑄造工房」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ』京都大学埋蔵文化財研究センター 1991年
- (7) ここでは粗型の成形を型作りとして復原したが、問題点も多く残っている。まず、粘土円板を型に押し込むだけで粗型側面と狭面の滑らかな面ができるかどうかである。とくに、型が木製であれば粗型狭面と側面に木目が残っている可能性もある。しかし、現状ではそれらの痕跡は確認できない。そこで、視点を変えて回転台成形の可能性を考えてみると、糊殻を敷いた台上に粘土円盤を乗せて成形し、後に側面と狭面を革や布で滑らかに調整したことになる。しかし、回転成形の痕跡は粗型には全く認められず、何よりも糊殻を敷き詰めた回転台上では粗型が台上に付着せず回転成形が不可能であろう。このように、粗型成形が型作りでも回転台成形でも問題点が残るが、現時点では型作りの可能性が高いと考えている。
- (8) なお、粗型中央の穿孔を粗型成形のための軸穴とする考えもあるが、資料を観察していると必ずしも穿孔が粗型の中心にくるわけではなく、粗型成形との関係は想定できない。実際に、九町から出土した長方鏡鑄型の粗型にも穿孔が施されているが、この粗型の形態は円形ではなく長方形である。また、真土部の成形段階においても、後述するように円鏡の鏡背面鑄型では挽型の軸穴に利用されているが、鏡面鑄型では挽型が行われた痕跡が認められず、円形粗型で長方鏡を製作した例もある。粗型の穿孔は真土部成形のための挽型の軸であるとともに、鈕座の位置を確定することが重要な要素であり、方鏡でも鈕座を中心に展開する構図では、下絵の中心として穿孔部を鈕座に利用したのであろう。粗型の穿孔の性格については、穿孔方法など今後解明すべき多くの問題点を残している。
- (9) 鑄型側面に型合わせの粘土が付着する例は和鏡鑄型に限らず、他の仏具鑄型にも共通する。おそらく、

型合わせを行う鑄型は、すべて側面を粘土で包み込んで焼き締め固定したと考えられる。

- (10) 沢田正昭「遺跡・遺物の保存科学(4)」『考古学研究』第27巻第1号 1980年
- (11) ただ、鑄込みを行うのに鏡一面分しか作らないとは到底考えられないので、型合わせを行った鑄型を数面分用意してから鑄込みを行ったと想定できる。
- (12) 『京都府遺跡調査概報』第27冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988年
- (13) 『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- (14) ただ、他の京内から出土した16~17世紀の資料では、鑄型縁部の外側斜面が明瞭な鏡鑄型があり、ここで示した特徴がこの時期の一般的な型式表徴とは一概に言えない。
- (15) 網野善彦「中世都市論」『岩波講座日本歴史』第7巻 岩波書店 1976年
網野善彦『日本中世の民衆像—平民と職人—』 岩波書店 1980年
- (16) 広瀬都巽『扶桑紀年銘鏡図説』大阪市立美術館学報第1 大阪市役所 1938年
後藤守一「鎌倉時代鏡について」『考古学雑誌』第30巻第1号 1940年
中野政樹『和鏡』日本の美術第42号 至文堂 1969年
- (17) 前田洋子「羽黒鏡と羽黒山頂遺跡」『考古学雑誌』第70巻第1号 1984年
- (18) 京都国立博物館の久保智康氏よりご教示を得た。
- (19) 難波田徹『鏡像と懸仏』日本の美術第284号 至文堂 1990年
- (20) 久保智康「平安後期出土鏡の研究序説」『東アジアの考古と歴史』下巻 同朋社 1987年